

## 1996年春季極域研究連絡会の報告\*

—極域・寒冷域研究連絡会への名称変更—

平 沢 尚 彦<sup>\*1</sup>・中 村 尚<sup>\*2</sup>・浮 田 甚 郎<sup>\*3</sup>

気象学会春季大会3日目(5月23日)のセッション終了後に極域研究連絡会が行なわれた。出席者は約30名であった。

前半は東京大学・海洋研究所の木村龍治氏による講演会、「全球規模の5日波動の励起に果たす南極大陸の役割について」が行われた。講演会では、定在波、伝播波を作り出す単純な水槽実験の紹介から始めて、東西波数1の特徴を持つ南極大陸上空で西風の5日周期の変動を起こすことによって全球規模の5日周期の波が作られることが示された。こうして作られる波は観測される“5日波”の特徴をよく再現していた。

引き続き行われた討論では、世話人が若い世代に変わりつつある極域研究連絡会に対して、今後の活動、期待すること、改善点などについて参加者の活発な発言があった。討論を通じて、参加者の興味が多様化していることを感じた。更に、連絡会に対して、以下の2つの役割を果たす事が要請された。1つはこれまで通りの講演会、議論の場を維持し続けること、もう1つは学会分科会等のコンビナーとして機能することである。

以下に討論会で出された主な意見とその後の対応について報告する。

・現在進行中のGAME/シベリア等に見られる様に、研究対象が以前に比べてより中緯度に広がっている現状をふまえて、従来の“極域研究連絡会”という名称を変更し“極域・寒冷域研究連絡会”としてはどうかという提案がなされた。これに対し今回の連絡会参加者の大勢の合意を得た。更に後日新幹事メンバーに対

してこの名称変更の是非について調査したところ、大多数の賛同を得たので、気象学会の正式な承認を得た上で、近い将来、新名称へと変更し、活動を続ける事にする。

・今後分科会形式となる学会のコンビナーとしても機能すること。この際、極域の分科会は2～3年に1度程度とし、発表される研究内容の充実を図り、会場での議論を一層活発なものにしたい。

・海洋学会などの他学会、他団体との接触の必要性。  
・極域の大気構造をあらわす新しい概念モデルの確立を目指す。

・南極観測のより一層の活性化を図るため、観測のアイデア・観測への要望などの意見の収集や、極域観測への参加に興味を抱く人々への情報提供などの場としても機能すること。

・従来どちらかと言えば観測研究が主体となりがちだった極域研究に、データ解析や理論・数値モデルを専門とする研究者の幅広い参加を促すこと。そのため、極域観測(特に南極観測)で得られたデータの公開を一層促進する。

極域研究の学際的な性格を考慮し、幹事をできるだけ幅広い分野から選ぶという前回の会合の合意を受けて、今後は以下のような新幹事メンバーで会の運営に当たることとした。

代表：木村龍治(東京大学・海洋研究所)  
榎本浩之(北見工業大学・土木・寒冷地工学)  
児玉裕二(北海道大学・低温科学研究所)  
本田明治(北海道大学・低温科学研究所)  
塩谷雅人(北海道大学・地球環境科学研究所)  
青木周司(東北大学・大気海洋センター)  
田中 博(筑波大学・地球科学系)  
青木輝夫(気象研究所・物理気象研究部)  
本井達夫(気象研究所・気候研究部)  
松本 淳(東京大学・理学部地理学科)

\* Report on the Workshop of Polar Research Committee (仮称), Spring 1996.

<sup>\*1</sup> Naohiko Hirasawa, 国立極地研究所.

<sup>\*2</sup> Hisashi Nakamura, 東京大学理学部.

<sup>\*3</sup> Jinro Ukita, 宇宙開発事業団.

© 1997 日本気象学会

中村 尚 (東京大学・理学部)  
 阿部彩子 (東京大学・気候システム研究センター)  
 山中康裕 (東京大学・気候システム研究センター)  
 高田久美子 (国際農林水産業研究センター)  
 増田耕一 (都立大学・理学部)  
 橋田 元 (国立極地研究所)  
 平沢尚彦 (国立極地研究所)

森本真司 (国立極地研究所)  
 浮田甚郎 (宇宙開発事業団・地球観測センター)  
 立花義裕 (東海大学・文明研究所)  
 東久美子 (長岡雪氷防災実験研究所)  
 林 政彦 (名古屋大学・太陽地球環境研究所東山)  
 大畑哲夫 (滋賀県立大学・環境科学)  
 小西啓之 (大阪教育大学・理科・気象)

編集後記：「天気」にしても気象集誌にしても、およそジャーナルというものは多くの人に読んでもらってこそ価値が上がるものと思います。どのジャーナルの編集委員も一人でも多くの人に読んでもらうために努力しています。「天気」の場合は学術誌の性格と情報誌の性格を合わせ持っており、読者層も広くかつ読者の要望も多岐にわたっているために、私たち「天気」の編集委員はいかにしてそれに応えられるような魅力あるジャーナルにするかということに日々苦心しているわけです。

より多くの人に読んでもらうためにジャーナルが備えなければならない要素はいくつかあります。もちろん第1は読む価値があることです。「天気」は学術誌ですから、論文や解説など学術的に価値の高いものや気象学的に重要な情報が掲載されなければなりません。一方、情報誌としては「読んで得する情報」が多く載っていることが必要です。そのような企画の一つとして、今年から「新刊図書案内」を始めました。第2は読み易く分かりやすいことがあげられます。第3に読者の声が反映されているジャーナルであることです。「天気」では「会員の広場」、「情報の広場」、「情報File」などさまざまなコーナーを設け会員の方々の声が掲載されるよう努力しています。

これらの努力はジャーナルの内容をよくすることで読者を広げようとするものですが、そのほかにジャーナルがより多くの人に読まれるためにはそれがより広く頒布されることが重要です。世の中に広く行き渡ったもの、行き渡るのに失敗したものの例は、ジャーナル以外にもさまざまなものにみることができます。最

近の顕著な成功例の1つを計算機にみることができます。私たちが計算機上で使っているソフトウェアの中には、無料で配布され急速に広まり発展したものがたくさんあります。たとえば数ある計算機のウインドウのうち、X-windowが他を抑えて広く行き渡ったのは、それが優秀なものであっただけでなく無料で配布されたからです。また、アメリカのある会社はインターネットを利用するための優秀なソフトを無料で配布し、世界中に頒布することで爆発的に発展しました。勿論ただであればいいというものではありませんが、目先の利益にとらわれず長期的戦略で勝利する方針は見習うべきところがあると思われま

さて、最近ある国立機関がすべての学術雑誌を計算機に取り込みインターネットで公開するという話があります。公開されたジャーナルを読む場合、課金されるかどうかは各ジャーナルにまかされる予定です。つまりあるジャーナルではそれをインターネットで読むと課金され、あるものは無料でみることができるといことです。インターネットでジャーナルを見ることができるようになった場合、ただで見れるのだからそれを購読する人が減るという予想と、一方で読者が増えるのだから、購読者も増えるという予想が考えられます。たとえば「天気」を無料で公開した場合、あなたは「天気」を購読するのをやめますか？ 私の全く個人的な意見ですが、長期的戦略をとった方がより広く行き渡るというのはさきに挙げた計算機関係の例だけではないと思うのですが、いかがなものでしょうか？ (坪木和久)